

長野県における勸農社実業教師真鍋猪之吉の活動

西村 卓

はじめに

第一章 北安曇郡での真鍋の活動

第一節 真鍋聘用以前

第二節 北安曇郡での真鍋の聘用

第三節 『勸業会日誌』にみる真鍋の改良法

第二章 長野県における勸業政策の転換

第三章 園芸家真鍋猪之吉

第四章 恩師 林遠里先生

おわりに

はじめに

『長野県歴史人物大事典』^①に、勸農社の実業教師であつた真鍋猪之吉について次のような記述がある。

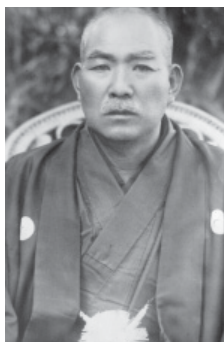


写真1 真鍋猪之吉

の赤蔵久保の山林を開拓、リングを栽培した。そして青森や北海道を視察して、長野に適したリングの育成に努めた。二七年（昭和二）には、県下一の大果樹園である長野市上松和合果樹園の園主となり、約一〇ヘクタールに、紅玉、倭錦、国光、祝などを栽培した。上松区民と同業者が三三年に和合林に建立した頌徳碑がある。

その「頌徳碑」の碑文を以下に採録しておく。



写真2 上松にある「頌徳碑」

真鍋猪之吉翁ハ、父茂三郎母いそノ長男トシテ、明治四年十二月十日福岡県筑紫郡南畑村ニ生ル、少ニシテ志ヲ立テ農聖林遠里先生ノ門ニ入りテ農牧ヲ研究シ、明治廿七年八月初メテ本県ニ聘セラレ北安曇郡農事巡回教師トナリ、同廿三年下水内郡ニ転シ、後更ニ下伊那・上水内両郡ニ転任シ、到ル処専心指導ニ

努メ名声アリ、特ニ有畜農業ニ寄与スル所尠カラス、四十二年七月職ヲ辞スルヤ、当時ノ上水内郡長紀浦次郎氏竝ニ模範村長西筑摩郡山口村宮下虎三翁ト協力シテ、長野市上松地籍ニ和合果樹園ヲ創設シ、爾来廿有余年孜々トシテ其ノ経営ニ任シ、就中苹果ノ栽培ニ心ヲ傾ケ、屢青森県・北海道等ヲ視察シテ、斯業ノ改良進歩ヲ図リ、傍ラ附近後進同業者ノ誘掖啓発ヲ懈ラス、今ヤ信州林檎ノ声価天下ニ高キモノ、蓋シ翁畢生努力ノ賜ナリト謂ハサルヘカラス翁昭和七年十月廿六日病ミテ没ス、享年六十二、上松区民及同業者相謀リ碑ヲ建テテ、翁ノ遺徳ヲ後世ニ伝ヘムトシ文ヲ余ニ徴ス、仍テ其ノ梗概ヲ記スト云爾

昭和八年八月

長野市長 丸山弁三郎 題額撰文竝書

以上の記述から、明治二七年（一八九四）に長野県北安曇郡に初めて招聘されて以降の真鍋猪之吉の県下での事蹟を読み取ることが出来るわけであるが、当初、彼が福岡県から長野県に勸農社の実業教師として派遣され、遠里農法の普及者として活動し、勸農社の衰退後も彼は帰福せずに、地元に残り、苹果（リンゴ）の栽培と開発に努力し、「信州リンゴの開発者」と評されるまでになる。

勸農社の実業教師たちの活動については、拙著⁽²⁾において、栃木県で活動した谷茂三、島根県鹿足郡に派遣されたのち、地元の名望家である堀家に雇用され、地元に着した高田万太郎、その他、『福岡県史 近代資料編』『林遠里・勸農社⁽³⁾』の口絵で紹介した、三島（高地）シカ（石川県派遣）、松隈仙蔵（鳥取県派遣）、谷勘吉（宮城県派遣）、柴田善七（石川県派遣）、品川保右衛門（長野県派遣）など、濃淡はあるがそれぞれ活動の事蹟をたどることができた。しかし、派遣先においてその地域における特産である農産物（リンゴ）の開発にその生涯をかけた真鍋のような人物には、いまだ出会ったことがなかった。

本稿においては、まず明治二十七年（一八九四）に、真鍋が弱冠二三歳ほどの若さで、長野県北安曇郡に郡雇の実業教師として派遣されたのちの活動を、できる限り資料に忠実に復元したいと思う。明治二〇年代後半から三〇年代前半にかけての時期は、勸農社が衰退していく一方、県下での農事指導体制が県立農事試験場や系統農会へとシフトしていく。そういった時代状況のなかで、自らの処し方を迫られた真鍋は長野県にとどまり、長野県農業の発展のために献身することを決意する。なぜ彼はそう決意したのか、「日記」などその詳細を知る資料をみることはできないが、そういった時代状況のなかでの彼の活動を復元することで、その一端を探り出したいと思う。

第一章 北安曇郡での真鍋の活動

第一節 真鍋聘用以前

長野県では、明治三十五年（一八九二）から勸農施策の一つとして稲作改良に着手することになり、当時全国的に巡回・派遣活動をしていた林遠里・勸農社の稲作改良法の導入を決定する。そのために、県庁の直属雇として勸農社実業教師原田勝三郎を聘用し、県農商係員清水三男熊を専任担当者として、県下各郡（当初は小県、更級、埴科、上高井、上水内郡といった北信地方が中心であった）に試験田を設置し、それを原田が監督指導するという形でスタートしたのである。⁽⁴⁾

明治二六年（一八九三）に入り、新たに試験田の設置とその担当を願う農民が数百名に達したが、原田一人での指導監督の困難が予想されたことから、前記五郡に南佐久、北佐久、東筑摩、下高井各郡を加え、前年からの試作人と合わせて一四〇名を試験田担当試作人と決定したのである。

明治二七年（一八九四）には、試験田の箇所はさらに増加し、原田一人での指導監督は困難を極め、改良法の試作

自体かなりの粗漏をみるようになった。県当局も県庁直属雇という形で、全県を網羅した改良法導入の困難さは認識していたようで（同年は改良法導入の当初計画の最終年に当たっていた）、各郡雇での聘用を奨励したこともあり、各郡ではそれぞれの独自の勸業費目でもって勸業社実業教師の聘用を決定してゆくのである。そのさきがけとなったのが北安曇郡であり、「明治廿八年より米作改良法を実施するの目的を以て、其準備として本年稲田出穂の時期より改良教手を聘雇^⑤」することを目的として、前年の一二月の郡会通常会において、勸業費のなかに米作改良費を盛り込むことを決定している。それによれば、勸業費二八〇円九七銭中二〇一円六〇銭が稲作改良費であり、その内訳は俸給一二〇円（月俸二二円）、旅費八〇円、通信費一円六〇銭となっており、勸業費のほとんどが稲作改良費、それも実業教師聘用費に当てられていることがわかる。^⑥

第二節 北安曇郡での真鍋の聘用

『信濃殖産協会雑誌』^⑦は、真鍋の着任を次のように伝えている。

○米作改良教手 本県庁直轄米作改良試験の好成績ありたることは、本誌の屢ば報道せしところなるが、北安曇郡及び南安曇郡の両郡に於ては、本県の試験実施方法に倣ひ、郡の事業として之を実施することとなり、其の教手は本県の紹介により、福岡県の有名なる老農林遠里翁の門人を招聘することに決し、北安曇郡へは真鍋猪之吉氏去る八月一日、南安曇郡へは高田惣五郎氏九月一日孰れも着任せり

北安曇郡への真鍋の着任は八月一日、南安曇郡への高田の着任は九月一日と報じている。

着任後、真鍋は県の改良法伝習方法に倣い、郡下各地での遠里稲作改良法の伝習、試作地の設置・指導に着手した

のである。『信濃殖産協會雜誌』⁽⁸⁾にその概況が記述されている。長文になるが引用しておく。

北安曇郡改良米麦作及馬耕伝習の概況

同郡に於ては郡会の議決を経て、昨二十七年八月県庁の紹介を以て福岡県勸農社長林遠里氏の門人米麦作改良教師真鍋猪之吉氏を聘し、爾来米作に就ては撰種の時期より同氏の方法に拠て種子を精撰し、冬中土中圃となし、本春発芽の期を待て播種せしも、麦作に就ては同氏来郡の当時撰種の時期已に後れしより、無已在来作の種子を以て同氏の耕種法に依り種植したり、目下其發育の概況并に同氏に就て馬耕伝習者の状況等左の如し

大麦耕種の概況

本郡は元来氣候寒冷の爲め田の作付は総て一毛作となし、麦作をなすは僅かに池田町・会染・七貴・陸郷等数村の内或る一小部分に過ぎざるを以て、本年に在ては先以て右四ヶ村に改良麦作を試種せしに、其状況在来作に比し総て株張成育共に佳良にして、一株に付二十本乃至三十本に分蘖し、抽穗整一にして成熟も凡そ一週日許り早ければ、在来作の遠く及ばざること知るべきなり、右四ヶ所の内、池田町村は在来作の比較田も其耕耘法改良作に準じたるを以て著しき差違なきも、会染・七貴の両村は在来作に比し四五割の増収は必ずべく、陸郷村に至ては、試験田の土壤瘠悪従来の麦の生育せしことなしとて、一毛作の外顧みざる地所なりしを以て幾分前者に劣ると雖ども、在来作の比較田とは実に霄壤齟ならず、其収穫に至ては五倍以上の増収を見るべきは、今より信じて疑はざる処なり、此地陸郷村に於ける畑作の分は、田作の如き差なしと雖も、是亦二三割の増収はあるべしと認む、其試作人の住所氏名左の如し

池田町村 薄井貞一郎

会染村 那須 浅太

七 貴 村 矢 口 時 司

陸 郷 村 遠 藤 千 代 司

大麦試作の概況右の如くなるを以て、左の方法に依り改良を施さば、大町以南の地は充分二毛作田となし得るの見込あり、尚ほ平村以北の地と雖ども今秋に至り試植するは最も必要たるべし

種類の改良

本県下中本郡の如きは最も寒地なるに拘はらず、従来麦作は最も晩種と称すべき大麦・小麦のみを種植するが故に、稲作付の時期に至り差支を生ずることありと雖ども、是れを早熟する裸麦となすときは、毫も斯る支障なきに至るべし

馬耕の施用

馬耕にて畝犁となすときは、土地を深耕し、土塊を細末とし、光線を射入し、土壤を乾燥せしむるが故に、積雪の融解を速やかにし、従て成育を迅速ならしむるの効あり

施肥法の改良

積肥・焼肥を製造し、播種の際充分床肥を施し、加ふるに寒中に於て施肥し、春季に至ては登熟を主とし、従来如く春肥をなさざるときは、自然早熟するに至るべし

苗代の概況

苗代仕立方は水陸二様とし、左の町村区分設備しも、本年は稀なる旱魃なりしがため、陸苗代は概して灌水に不足を告げ、且つ本年は試作の初年なるを以て、教手に於て屢々注意を促したるにも拘はらず、雀・雞・鼠・けら等の被害を受けたるものもありて思はしからず、間々成育佳良なるものありと雖ども、水田苗代に比し發育稍々劣りたり、水田苗代は一般に在来作に比し成育佳良苗質強健にして、現今既に二三本に分蘖せしものあり、尤も

在来法の慣習となりたる為め、水の灌排其宜しきを得ざるケ所の如きは、幾分孱弱を免れざるもの、今後の注意を怠らざれば、挿秧期迄には回復するの見込あり、各町村試作人並に種別左の如し

大 町	平林彦一郎	水
社 村	鈴木慶太郎	陸
同	高橋平兵衛	水
松川村	平林 弥門	水
常盤村	岸川 平一	水
池田町村	薄井貞一郎	水
会 染村	那須 浅太	水
七 貴村	矢口 時司	陸
陸 郷村	遠藤千代司	陸
八 坂村	北澤庄三郎	水
神 城村	茨木佐五衛	陸
北 城村	横澤富三郎	陸
南小谷村	相澤佐太郎	陸
北小谷村	奥村 常吉	水
中土村	田原 順衛	水

(右の内、常盤村は播種以前種子に腐蝕の徴候ありたるが為め發生不良、殊に水の灌排其当を得ざるより成育の見込なし)

右の外、有志にして試作する者左の如し

会 染 村	山 本 繁 松	陸
同	遠 藤 才 次 郎	陸
同	勝 家 太 十	陸
八 坂 村	佐 藤 茂	陸
中 土 村	斎 藤 安 太 郎 外 一 名	水

馬耕伝習者の概況

本郡は池田町以南の一地方を除くの外は、概して俗に苅敷と称へて、樹木の枝梢を以て肥料と為すの仕来あり、其枝梢の大なるは径一寸以上長六尺有余にして、之を幾個となく水田に埋め置き、以て其養分を取るを常とするが故に、先づ肥料の改良を施すに非ざれば馬耕の普及は望むべからずとし、昨年秋期僅かに会染村・池田町村・七貴村・陸郷村の一部に実施せしに止りしが、本期には試みに苅敷の最も大なるものを試用せる大町に於て之を実施せしに、存外充分施行し得たるを以て、社・北城等に順次施行し、益々其効を顕はせしにより、伝習者漸次増加し現今七十余名に達し、尚ほ陸統伝習の申込あり、併し苗代の監督多忙の時期に際したるを以て、未だ普及するに至らずと雖とも、今秋期に至り普く拡張するに於ては、忽ち数百人を得るの見込あり、現在独立して馬耕し得るに至りたる伝習者は左の如し

付言 馬耕に抛て得る処の利益は概ね左の如し

第一 畝犁にて深耕し、田土を改良するの益あり

第二 土塊を細末となし、土壤を交換し光線を射入し、土地乾燥するの益あり

第三 人力省くの益あり

大町

平林 彦一郎 平林 末次郎

社村

一志 伊太郎 遠藤 皆吉 小野 代吉

神方 金作 塚田 折次郎 矢口二 佐太郎

矢口 千代松 牛越 佐次兵衛 平林 直藏

北條 吉弥 鈴木 峯松 横澤 登市

横澤 安太郎 横川 甚八 東山 銀十

横澤 喜忠次 横澤 德太郎 鈴木 慶太郎

吉澤 多市 中村 源作 牛澤 吉太郎

池田町村

薄井 貞一郎 薄井 太善次 薄井 本一

太田 次郎平 太田 常弥 密澤 貫治

大澤 德太郎 村上 朝弥 大澤 次三郎

会染村

山本 繁松 遠藤 才次郎 勝家 太十

小林 百合藏 和澤 駒次郎 丸山 長作

小林 甚一 那須 金十 那須 浅太

那須 絹三郎 那須 幸行 田中 唯次

那須	五平	諸岡	三郎	山崎	栄一
柴田	幸吉	高山	常次	山崎	秀一
太田	美代松	三澤	平次	太田	宇吉
今溝	伝	宮澤	金作		
七貴村					
矢口	時司				
陸郷村					
遠藤	千代司	遠藤	新次郎	窪田	五郎次
窪田	熊七				
北城村					
横澤	富三郎	松澤	義太郎	郷津	松平
横澤	秀実	塩島	喜代次	内川	徳松
内川	徳蔵	松澤	織次郎	矢口	八蔵
内川	善治	松澤	直次郎		
南小谷村					
相澤	佐太郎				
北小谷村					
奥村	常吉				
中土村					

田原 順衛

計 七拾四人

外に見習中四五人あり

真鍋が着任した時期は八月であり、次年度の米作に關しての選種、稲種の冬中土囲い法の施行、春季に至り水苗代、畑苗代への播種までを済ませたが、麦作に關しては選種の時期に遅れていたため、在来の種子で以つて試作せざるを得なかった。

元来、北安曇郡は寒冷の地であつたこと（冬期には積雪がある）から、一毛作が主流であり、稲の裏作としての麦作は、ほんの一部を除いておこなわれていなかった。その地での改良麦作の伝習は、おそらく困難を極めたと考えられる。また、その一部の在来麦作においても、晩種の大麥・小麦を作付けしていたことから、稲作の作期と競合する状態であり、早熟種の裸麥の作付けを奨励するべきだと述べられている。

米作の苗代に關して、真鍋からの指導注意にもかかわらず、畑苗代での雀などの鳥害、鼠や「けら」による害に充分対応しきれてなく、水田苗代よりも成育は劣ることになった。この点は、真鍋が林遠里改良法のなかで伝習しようとした種々の苗代法の順位付けとは異なる結果に終わっており、畑苗代法の技術的確立がいまだなされていない状況を見て取れる。

馬耕伝習については、やはり慣行的な施肥法である「刈敷き」として施用される「樹木の枝梢」、それも太さが一寸（三センチほど）以上、長さが六尺（一八〇センチほど）が馬耕普及における一つの障害として認識されている。馬耕普及のためには、この障害の除去＝施肥法の改良（積肥や焼肥への転換、同肥に關しては後述）とあいまって、福岡式の抱持立犁の導入普及が重要な要件となつたであらう。

第三節 『勸業会日誌』にみる真鍋の改良法

以上、真鍋が着任後一年目の同郡での指導内容と、そこから見えてきた問題点を読み取ることができた。実業教師にとって試作人への直接的指導とともに、勸業会、農談会などでの改良法全般に関して講演をし、そこに参集した農民たちへの啓発も重要な活動になる。本項では、真鍋の伝習しようとした技術体系が総体としてどういったものであったのか、明治二十七年（一八九四）一月に開催された勸業会での彼の演説内容を『北安曇郡第壹回勸業会日誌』^⑩を検討することから浮き彫りにしたい。

北安曇郡第一回勸業会は、明治二十七年（一八九四）一月二三日午後から二四日昼頃まで同郡役所において開催され、二四日の同会の閉会後は、種苗交換会が引き続き開催されている。三〇名の勸業会員の出席と、「随時会員」八七名、そして番外として真鍋が出席した。同日午後二時からの開会で、問題として一、米麦作改良法、二、蚕業改良法、三、山林の衰状ヲ挽回スル方法、四、植林ヲ拡張スル方法が掲げられた。しかし、実際は一の米麦作改良法に終始し、三日間にわたって真鍋の独壇場とっていいほどであった。

会長に選出された神城村の下川新六が開会に先立ち、「本会ハ元來農談会即チ百姓會議ナレハ、万事平易ニ致シタシ、（中略）從來実業熱心家ハ発言ハ不得手ニシテ、弁論家ハ実地ノ経験ニ乏シキノ傾アリテ、其遺憾ニ感スル処ナル故、可成発言ニ容易ナル様ニナシ、各自腹藏ナク其意見ヲ吐露セラル、コトヲ望ム」と挨拶をした。^⑪続いて、米作改良法中の種子精選及び貯蔵法について、談話と質疑応答を促したのである。

以下に真鍋の演説をその項目に分けて逐次検討してゆきたい。

1. 〈稲種子精選及び貯蔵法〉^⑫

稲種ノ選方ハ種々アリ、塩水撰・肉眼選又ハ雄穂雌穂ニテ選ムト云フノ類ノ如シ、小生ノ主トシテ実施セントスル

ハ肉眼選ノ方ニテ、其法ハ先ツ稻ノ田ニアル中ニ適當ノ期節ニ於テ、肥料ノ適否及稻ノ出来方ノ工合等ヲ見テ篤ト之見定メ、而シテ刈取ノ時期ヲ誤タスシテ收穫スルナリ、徒ニ塩水選トカ雌雄穂トカ云フノミニテハ不完全ナリ小生モ従前ハ塩水選ノ方ヲ実施セシコトアリシカ、林遠里先生ノ門ニ入りテ以來ハ、之ヲ実行セス、林先生ノ説ニヨレハ稲種ハ塩テ撰ツタノミテハ充分ノ良種ハ採レス、其故ハ種ノ充分熟シタルモノハ、之ヲ塩水撰ニスルトキハ皆沈ム故、単ニ此法ノミニヨリテ選ム時ハ、此沈ミタルモノハ尽ク良種ト視做スヘシ、然レトモ、其中ニテ種ノ充分熟シ過キタルモノニハ破レ目カ出来テ居ル故、不完全ナルモノナレトモ、塩水選ノミニテハ之ヲ鑑別スルコトカ出来サレハナリ、故ニ種ノ良否ハ肉眼ニテ撰リ別ケルヲ可トス、其後之ヲ颯扇^{トウ}ニテ七八回モアホルナリ、初メ一回ハ静カニアホリ、二回目カラ少シク強クアホリテ、一升三百目以上ノ目方ニシテ、破レモナク、色合モ良シトスレハ、良種ト云フコトヲ得ヘシ、併シ塩水撰トテ一概ニ悪キニ非サレトモ、小生ハ目下之ヲ実行セス

真鍋は、稲種子精選法として「塩水選」「肉眼選」「雌穂選」をあげ、そのうちで「肉眼選」が適當であるとしている。採種の適期に、肥料の効き具合、稻の出来具合を勘案して刈り取る。そして、それを唐箕に七、八回かけ、目方が一升あたり三〇〇目以上のものを種籾として最適だとするのである。¹³⁾

参加者からの選種時期についての質問に対しては、「稲種撰種ノ時期ハ、稻ノ種類ニヨル、即チ早中晩等ノ区別アル故、彼岸後何日トカ云フテ日限ニヨリテ定ムルコトハ出来サルモノトス、故ニ模様ヲ見テ撰種スルナリ、稲穂ハ先ツ穂先ギカラ熟シ、初メニ薄黄色ヲ呈ス、段々下方ニ下ガル、其ガ中央ニ来レハ穂先三分ハ黄色ニ変ス、薄黄色カ穂元迄来レハ、半分カラ以上ハ純粹ノ黄色ヲ呈ス、此時カ尤モ選種ニ適當ノ時トス」と述べる。¹⁴⁾すなわち、穂元まで薄黄色に変化し、穂の半分が黄色に変化した時期を選種の適期とするのである。

「塩水選」に関しては、遠里の門下に入るまでは施行していたが、入門以降はおこなっていないこと、そしてそれ

自体一概に悪い方法とはいえないが、過熟で破れ目がある種子を選別できないことから、自らはおこなわないとする。貯蔵法に関して参加者から「元来此地方テハ種ヲ拵ヘテアホリ、後俵ニ入レ、蔵又ハ家ノ中ニ置クヲ通例トス、尚他ニ良法アリヤ」¹⁵という質問に、真鍋は稲種の播種期がまさにこの時期であり、「貯蔵法ト云フテ永ク蔵又ハ家ノ中ニ置クコトハナサヌナリ」¹⁷として、播種前に貯蔵するとしてもせいぜい採種後三、四〇日くらいで、吠に五升ほどを入れ、空気の流通のよい所に吊るしておくのがよいとした。

この点については、真鍋のその後の発言で、次のように要約している。¹⁸

第一 田ニアル中ニ見定メルコト、第二 刈取ノ時期ヲ誤ラサルコト、第三 穂ヲ日陰ニテ乾カスコト、第四 穂ノ中央ヨリ先ノ種子ヲ採ルコト、第五 六、七回以上颯扇ニテ吹返シ、一升三百目以上ノ目方トナリタル種子ヲ採ルコト、第六 種俵ニ入レ置クコト

2. 〈植物生育の大意〉

真鍋は、「草木ハ独リ人爲ノ力ノミニモ非ス、又独肥料ノ為スノミニモ非サルコト判然タリトセハ、果シテ何ニヨリテ生育ヲ遂クルモノナルヤ」¹⁹と自問し、深山幽谷の岩石の上に大木が生長するのは、誰かが種を蒔いたわけでもなく、また植え付けたわけでもない。すべて四季の循環と風雨の加減によって自然と生長したのであるとし、「草木ハ天然自然ノ化育ニヨリ生育スルモノ」で「生長発達ニ付テハ、人爲ノ力ニヨリ勝手自由ニ取扱フノ理ナシ、只天功ノ不足ヲ補フヘシ」²⁰と述べ、さらに、人爲ニ農業は勝手気ままに生産をあげるというものでなく、あくまでも「人ハ其自然ノ理ニ従ヒ、天地ノ化育ニ基キ天ノ蒔クトキハ人モ亦之ヲ蒔キ、天ノ稔ラスルトキハ人モ亦之ヲ稔ラスルコトニセサルヘカラス」²¹と述べている。これはすなわち遠里がいうところの「天性に従う」²²という論理と同一のものである。

そして、話は稲の生育論に進む。その前提として彼は稲の性質について議論をする。「稲ハ水草ノ如ク又陸草ノ如シ」であるが、それを見極めるために一反歩を甲（深水）、乙（二寸ないし七、八分）、丙（無灌水）の三区画に別けて実験をする。その結果、米質・收穫ともに乙が優れ、それに次いで丙、甲であつた。そのことから稲は「陸草ニシテ水ノ深キヲ嫌ヒ、其性質水氣ヲ余分ニ吸ヒ取ル丈ノモノ」と結論付けるのである。これは遠里が稲の性質として「好水草論」を主張することと合致する。⁽²⁴⁾

このことから、「米田ハ只地ヲ潤ホス丈ヲ可トスルモノニシテ、余リ深キハ宜シカラス、只乾カサルヲ以テ度トナスヘシ」として、灌水の場合は深水でなく、ごく浅水を推奨するのである。⁽²⁵⁾

次に、播種期であるが、この点も彼は実験を薦める。「試験ハ一年十二ヶ月ノ間毎月五日十五日廿五日ノ三回ツ、即チ一年三十六回二一寸離レニ五粒ツ、蒔キ、其苗ヲ更ニ二尺離レニ植ヘテ試験」する。四月までに蒔き付けたものは五月の田植えに間に合うが、六月の分は七月に田植えをおこなつても四分の一の收穫、七月に播種したものは八月に植え付けるが出穂・未出穂が混在、九月に播種したものの收穫は皆無であつた。そして前年一〇月から次年四月まで蒔き付けたものを比較した場合、前年の一〇月に蒔き付けたものが第一等の收穫をあげたことから、「是レ目今（二〇）月から一二月にかけての時期――筆者注）ノ季節ヲ以テ播種スルヲ尤モ可ナリトスルコトヲ知ルヘキナリ」と結論付けたのである。⁽²⁶⁾

以上のことから、おのずから奨励技術としては一〇月下旬から一一月にかけての時期に、畑苗代に冬播きすることが最上であるということ、それこそが実験上でも、天地のなせる業からいっても当然とする。そして真鍋は、播種方法としては等級別に五つに分けた。⁽²⁷⁾

第一 冬蒔き畑苗代法

第二 寒中土囲い・春蒔き畑苗代法

第三 寒中土囲い・春蒔き水苗代法

第四 寒水浸し・春蒔き畑苗代法

第五 寒水浸し・春蒔き水苗代法

この点に關しても、遠里の推奨技術とはほぼ同じ内容となっている。

なお、参加者から「殊ニ寒中蒔キノ如キ、本郡ノ様ニ寒氣強ク積雪甚シキ処ニテモ差支ナキ考ナルヤ」という質問⁽²⁸⁾に対して、真鍋は、特に問題はなくその優先順位は上述のようであるが、「随分其世話カ面倒ナル故、其中ノ容易ナルモノヨリ撰ンデ行ヒ、漸次ニ高尚ナル方ニ進ミ行クカ順序ナラン」と述べ、地域的な特性を鑑み、容易なものから始め、徐々に高尚なものへ進むほうがよいとするのである。

3. 〈麦作改良法〉

前述したように、麦作は同郡でほとんど作付けされておらず、作付けされていたとしても田麦でなく畑麦であること（稲の裏作としての麦作でなく、畑作としての麦作）、さらにその品種も晩生の大麦・小麦がほとんどで、結果として稲作の作期と競合するという状況であった。そういう状況のなかでは、麦作そのものの導入が同地方での改良作の導入を意味したのである。

①採取法 穂揃いのいい場所の中央から採種、唐箕選。

②耕耘 畝鋤をおこない、畝を立てる。畝の幅は三〜四尺。

③筋付け 畝に二条の筋をつけ、そこへ水肥を施用。

④播種 筋ごとに播種、反当五、六合。一、二粒づつの薄蒔き。

⑤覆土 積肥を施用し、その上から覆土する。

⑥ 麦踏み 三葉ほどの時に一番麦踏み。草鞋履きで麦の頭上から踏みつける。

⑦ 施肥 筋間に施用。

⑧ 麦踏み 一番麦踏みから二〇日ほどのち、二番麦踏み。

⑨ 麦踏み 冬中氷凍の際に根を締めるため麦踏み。

⑩ 施肥 春に厩肥を施用。

⑪ 畝削り 春の施肥のときに畝を削り、その土で厩肥の上を覆う。

⑫ その他 麦奴予防法。種麦の木灰水への一昼夜浸水。

以上のような麦作改良法を述べているが、実は遠里の種々の演説筆記では、麦作改良法に関する記述はほとんどなく、それゆえ、真鍋のここでの麦作改良法は、真鍋の福岡での農事体験と、本年の試験田で緒についた麦作付けでの経験から述べられている(ただし、各地に派遣されている実業教師たちからの経験は含まれていると考えられる)。例えば、麦の播種量に関して彼は「小生ノ郷里テハ」^⑬として一反歩に二升くらいであること、さらに当地方が積雪のために傷害を受ける可能性があることから、本年の試験田では少し多い目にしたこと、来年になり雪の害を受けないとわかったときは、減量すると述べている。また、畝を作り筋蒔きを推奨しているが、もし多収穫を得ようとするなら、「小生ノ郷里ニテハ多ク実行」^⑭されている「株蒔き」での栽培がいいとしているのである。

4. 〈苗代法Ⅱ冬蒔き畑苗代法〉

① 播種 当地方では一月中旬より二月上旬〔小生ノ郷国^⑮では二月上旬〕。

② 場所の選定 日当たり良、空気流通良、砂交地良。

③ 耕耘 稲刈上げ後直ちに、畝鋤(乾燥不良)か平鋤(乾燥良)にする。耕耘↓乾燥↓施肥(希薄した水肥)を三

回繰り返す。

④ 畝作り 耕耘↓馬鍬掛け↓畝作り（幅三尺二寸）↓鍬や板による均平化。

⑤ 播種 坪当一合蒔き、その後鍬により圧迫。

⑥ 覆土 篩にて覆土（種の見えない程度）。

⑦ 藁覆い 縦横二重に覆い、縄にて固定。

⑧ 鳥獸予防法 鼠⇨栗の毛毯を苗代の周囲に置く。モグラ⇨畝の周囲を盤土まで浚う。万一進入すれば、灌水して駆除。けら⇨灌水駆除。雀⇨藁灰の散布。石油に浸した糸を周囲に張る。網切れを十文字に張る。子供を使い駆除。春蒔き畑苗代法については、寒水浸しや土囲いをした種籾を使用するため、畑苗代の作り方に違いはないが、播種は未発芽のうちにおこない、直ちに覆土することが必要だとした。

5. 〈苗代法⇨水田苗代法〉

① 場所選定 日当り良、風通し良、水利良の場所を選定。

② 耕耘 粘土質⇨冬耕、砂土⇨春耕。

③ 施肥 畑苗代と同様だが少し減。春耕の場合乾土後二回施用。

④ 苗代拵え 灌水後馬鍬掛け、一夜間湛水し、翌日鋤耕し均平化。

⑤ 代掻き 馬鍬による代掻き。

⑥ 施肥 反当三、四〇貫の木の芽立ちもしくは焼肥坪当二、三升を施用。

⑦ 乾土畝立 水を乾かし、畝立（幅三尺二寸、長一〇間ほど）。

⑧ 播種 坪当一合蒔、一、二分ほどの水加減。

⑨ 用水管理 水口に調節可能な水門を作る。

水田苗代に畝をどう立てるのかという参加者からの質問に対して、真鍋は縄を張って踏み切ただけでよいとしている。ここでいう苗代での畝立てとは、短冊型に苗代を区切ることで、害虫駆除と除草に便利であるとしている。また全体の水加減に関して、「改良作ノ水加減ハ浅キヲ可トス、即チ種籾ノ隠ル、カ隠レヌカ位ニテ、凡ソ三分位ヲ度トス」と述べ、浅水の必要性を説く。当地方のように寒地の場合は、水が冷たいため、暖めて灌水するほうが良いとも述べている。

また蒔き付け方法に関しては、蒔き付け時の風の具合を勘案して、朝方に、北風の場合は南方から、南風の場合は北方から蒔き、その場合も畝の端ほど発育が良いため「中央ヨリ両端ニ多ク蒔ク様ニ注意」すれば、生育が平等になると述べるのである。

6. 〈本田管理〉

① 本田耕耘 収穫後馬耕。春二番鋤、その際草肥・厩肥の鋤き込み、水肥散布。

② 灌漑 三、四日間暴露の後、灌漑。

③ 馬鋤掛け 縦横に馬鋤を掛け、二日間ほど寝かせる。

④ 施肥 山草の施用。

⑤ 馬鋤掛け 肥料の鋤き込み。

⑥ 田植え 地味により株当り苗一本から三本、坪当り三〇、三六、四二、四九株植え。

⑦ 灌漑 速乾地は徐々に灌漑、遅乾地は止水。浅水。

⑧ 中耕除草 寒中蒔きは田植え後一〇日目、春蒔きは一二日目、普通作は一五―二〇日目に蟹爪打ち（一番除草）。

この場合、田面の高低ができるため、やや深水。

その一〇日後、蟹爪直し（手作業）。その一、二週間後二番除草。またその一五日後四番除草。出穂時五番除草。

⑨排水

穂元に実が入り、華氏七五度位のととき排水。

馬耕に関して真鍋は「小生ノ持参シテ別室ニ具ヘ置タル道具ニテ馬耕ヲ為スモノトス、此具ハ輕便テ費用モ多カラス一円四五拾錢位ニテ得ラルヘシ」と述べている。彼が演説会場に馬耕用の「道具」を持参し、参会者に展示しているわけであるが、これは無床犁の抱え持立犁であつたことはいうまでもないであろう。

また、本田に馬鋤を掛けた後施用する「山草」に関して、同地方で慣行的に施用されていた長く大きな「枝梢」でなく、細分化したものを施用するように薦めている。

労働は地拵えを男子が、植付けを女子がおこなうことから、地味の上下による植付けの本数、植付け間隔などの指図が大切だと述べている。ただし、四九本を上限とし、綿密に植付けるためには、「縄ヲ張り、之ニ短冊様ノ者ヲ下ケ規矩ヲ定ム」⁽³⁶⁾ことが必要であること、そうすることにより「株モ揃ヒ、日光モ当リ、風透モ良キ故、充分其勞ニ当ル丈ノ利益アリ」⁽³⁷⁾とするのである。これは文字通り「正条植え」⁽³⁸⁾の励行である。

「蟹爪」打ちについて、真鍋はその効用を、一、「上ノ土ヲ下ニナス」⁽³⁸⁾とし、耕土の入れ替え効果、二、「十日目位ニ及ヘハ草ヲ生スレトモ、土ヲ上下スル為メニ大ニ之ヲ減スル」⁽³⁹⁾として、文字通りの除草効果、三、「肥料ノ分解ヲ助ク」⁽⁴⁰⁾として、より早い肥効を促すこと、四、「暖カナル上水ヲ地下ニ侵入セシムル」⁽⁴¹⁾とし、暖水による苗の促育効果をあげている。また、四番除草までは単に雑草を除去するためだけでなく、「根ヲムシリ取」⁽⁴²⁾るためのものであるとするのである。そもそもむしろとるべき「上根」は、稲の登熟に関係のない、葉と茎を肥やすためのものであるとの理由からである。

排水に関しては、稲には早中晩があることから、画一的な排水でなく、「實際ノ景況ヲ見テ水ヲ落ス」ことが大切と述べている。また土質を觀て乾燥地ならやや遅め、湿潤地なら出穂時にすぐに排水する必要があるとする。

7. 〈肥料製造法〉

ア 水肥

溜桶（四石入）に五分ほどの風呂水を入れ、それに人糞二荷を加え、さらに人尿・馬糞・米糠・油粕・魚粕・酒粕・醬油粕・野菜屑などとともに、あらゆる不用物を合わせ、桶の八分目までとし、それを充分に醸す。

イ 焼肥

土に五、六日乾かした芝草、さらには藁屑・塵芥・草履・破れ靴・草鞋・古下駄・木竹屑・木葉を加え燃焼。その場合、庇を設け、石を三方に置き、まず木竹を積み重ねこれを塵芥類で覆い、点火。これに粉糠さらに芝草を重ね、土を一面に被せる。再び塵芥、粉糠を被せ、さらに土を被せる。これを繰り返し、直径一間半くらいの大さに積み重ねて蒸し焼きにする。最後に人尿と風呂水により消火。なお、土のみでの焼肥法もある。

ウ 積肥

積肥小屋のない場合の積藁製法として、①二間半四方の区画を取る。②周囲に溝を掘る。③粉糠を敷く。④野菜の枯葉・切れ端、枇などを敷く。⑤二つ切、三つ切の藁をその上に置く。⑥既にて踏ませた山草を重ねる。⑦塵芥を掛ける。⑧その上にさらに藁を掛ける。⑨人糞尿をその上に掛ける。⑩その合間に鳥糞・厩肥を入れる。⑪その上に雨のかからぬように藁覆いをする。⑫二〇ないし二四、五日間ほど蒸釀する。⑬肥切り（南小谷村辺りで使用する板鋏にて可）にて切り出し再積する。冬の間に二回ほど施行。しかし、積肥小屋がある場合は、その「蒸シ工合尤モ宜シ」⁽⁴³⁾として積肥小屋の造設を奨励する。

これら肥料製造法では、遠里が各地の演説をする場合に推奨する肥料（水肥・焼肥・積肥）に関して述べているが、真鍋の演説内容は詳細を極めており、農事体験を積んだ老農としての面目躍如の感がある。その場合、当然彼がその体験を積んできた福岡での在来法があるわけで、「小生ノ郷里」「小生ノ郷国」といった文言が彼の口から頻繁に出ていることからそれが理解できる。例えば、積肥小屋の造設に関して、「小生ノ郷国ニテハ総テ肥料小屋ナキハナシ、如何ナル小農デモ肥料小屋ハアルナリ、肥料ニ覆ヒヲ為シ置クト否ヤトハ、其効驗ニ於テ大ニ差異アリ」、⁽⁴⁵⁾「小生ノ郷国テハ、農家ハ家屋ハ小サクトモ、肥料小屋ハ大ナリ」と述べ、⁽⁴⁶⁾それらが福岡地方における在来の慣行法として定着していること、それと比較して、この地方での肥料をただ雨露に暴露して置くという慣行が、肥効をなくしてしまうことになることに注意を喚起するのである。

8. 〈害虫駆除法〉

長野県において、本年（明治二十七年）を含め大きな被害を出した稲害虫は「苞虫（つとむし）」⁽⁴⁷⁾であった。この勸業会でも出席者から「苞虫」の被害について発言があった。⁽⁴⁸⁾また『信濃毎日新聞』においても以下のようにたびたび報じられている。明治二十七年九月二日付「ツトムシに就て」、同年九月一日付「豊里の苞虫駆除」、同年九月一六日付「布施村の苞虫駆除」、同「陸苗には苞虫少なし」、同年九月一八日付「再び苞虫駆除の法」、同年九月二〇日付「苞虫の蔓延被害と駆除規則の履行」、同年十一月六日付「更級郡栄村の県税免除願」などである。また、同様「信濃殖産協會雑誌」にも以下のような記事を見ることができる。「苞虫に付信濃殖産協會の回答」（明治二十七年八月 第九号所収）、「苞虫に付農科大学教員の説示」（同前）、「苞虫蔓延稲作惨害実況」（明治二十七年九月 第一〇号所収）、「苞虫の敵虫」（同前）、「苞虫の滅絶を期す」（同前）、「下高井郡通信 苞虫の捕殺」（同前）などである。以上のことから、害虫駆除に関して実業教師がどのような方法を教示するかは極めて関心の高い問題であった。

しかし、真鍋自身は「小生ノ郷国ニハ、苞虫ハ居ラザレトモ、螟虫ハ發育スルコト多シ」⁽⁴⁹⁾として、その詳細な駆除法については触れることができず、主に螟虫と浮塵子（うんか）についての駆除法に終始している。

まず「害虫駆除」の一般的理念を政府の「予防規則」に触れつつ、早期における協同駆除法について述べる。

○早期駆除 苗段階での早期悉皆駆除の必要性

「総テ害虫ハ、其初発ニ駆除スレハ其労少クシテ効多シ、愈蔓延ノ時ニハ労多クシテ其功少シ」⁽⁵⁰⁾と述べ、それはあたかも人の病氣と一緒で、「軽症ノトキニ治療スレハ其病忽チ癒ヘ、重症トナレハ医薬モ其効ヲ奏セザルカ如シ」と述べ、早期駆除の必要性を強調する。

○協同駆除 一郡一村もしくは一区協同としての駆除法の実施

①一村での団体化⇨各戸より何名宛として組織、他村からの入り作の分も加入、頭割り加入が不可能な場合、代金納。

②組合長の選任⇨無給、篤志。

③組の編成⇨二〇〇人の場合、一組二〇人、一〇組の編成。組頭の選任。

④捕虫網の準備。

⑤害虫発生時、駆除施行。採卵、捕虫網による駆除、火炊き⇨誘蛾により焼殺。

⑥特に浮塵子の場合、田面に注油。

協同駆除法に関しては、遠里の種々の「演説筆記」に、より詳細な内容を見ることができる。例えば明治二七（一八九四）年の和歌山県内務部発行の『米作改良講話筆記』⁽⁵¹⁾が一つの例であるが、遠里は当初からその協同性を強調していたわけではない。『勸農新書』初版（明治一〇年）⁽⁵²⁾、再版（明治一三年）⁽⁵³⁾では、害虫駆除は項目としてさへあがっていない。

明治一八（一八八五）年六月の『石川県勸業月報号外』に収録された「演説筆記」のなかで「螟虫駆除」にはふれられているが、協同駆除については記述がない。

しかし、明治二〇（一八八七）年刊行の『農事実益 日本米麦改良法』⁵⁴の「稲虫並びに小糠虫の駆除する法」では、「村中申合せ」によって駆除をおこなう必要性を説き、その後遠里が害虫駆除にふれる場合には、この協同駆除法を必須項目として強調するのである。その点では、明治二七（一八九四）年十一月におこなわれた真鍋の演説に見られる協同駆除法は、同時期の遠里の「演説筆記」で展開された駆除法に沿った内容といえる。

以上が、真鍋による勸業会での演説および質疑応答の主なる内容であった。勸業会は三日目にあたる一月二四日昼過ぎに終了し、午後からは第一回の種苗交換会が開催された。勸業会では、今後の対策として、一、害虫協同予防駆除法の施行、二、蚕業講話会実施、三、物産品評会開催という三つの建議書を郡長に提出することを決議している。

原田勝三郎ら先遣教師たちの長野県下での活動と実績が『信濃毎日新聞』や『信濃殖産協会雑誌』などで知られていたとしても、居並ぶ地元の老農的な農民を前にして、遠里改良法の総論から各論までその主要部分を演説するわけであるから、いまだ着任後四ヶ月足らずの真鍋にとっては、身の引き締まる思いであつたろう。

彼の演説内容は、総体としては遠里が各地でおこなった演説内容を大きく踏み外すものではなかった。たとえば使う事例などは、前述したように遠里が使うものと同じのものもあり、彼の意識のなかには、師である遠里から受けた様々な指導をより忠実に伝えようとしたことがうかがえる。しかし、そうでありながらも、彼は福岡で蓄積した農事経験を基礎としつつ、各地で活動する勸農社実業教師たちの経験も踏まえて、地元の農民たちに分りやすく、かつ丁寧な改良法の内容を伝えようとしたのである。三日間の日程で開催されたこの勸業会のほとんど総てを費やして、真鍋を通して遠里改良法の内容を聴こうとした北安曇郡の農民たちの改良法取り組みへの意気込みも、この勸業会か

ら感じ取ることができるであろう。

しかし、この雰囲気も明治三〇年代に入ると急速に減退し、県立農事試験場の開設を頂点として県における農事指導体制の軸が近代農学へ移行することによって、彼らの役割が質的に大きく変わろうとするのである。

ちなみに、明治三〇（一八九七）年十二月に開催された北安曇郡第一回農会では、ほとんど県立農事試験場の佐久間場長の演説を聴く場となり、真鍋は数度発言するだけに終わっている。文字通りこの変化は、明治二〇年代後半における近代農学と老農農法との同時並行的な導入政策から、近代農学重点化路線への県勸業政策の転換を象徴する一つの姿であった。

第二章 長野県における勸業政策の転換

長野県における明治二〇年代後半での勸業政策のあり方は、稲作においては林遠里と勸農社実業教師の招聘に重点があったといえるが、けっして老農農法一辺倒によるものではなかった。むしろ、一方で近代農学士たちを積極的に招聘しつつ、種々の政策を立案していったといってもよかった。

『信濃毎日新聞』および『信濃殖産協会雑誌』に収録されている記事から、近代農学士関連の事項を中心に年表風にまとめた。

第1表からもわかるように、近代農学士たちの招聘と、彼らの議論を基礎とした勸業政策が一方では推進されていることを見て取ることができる。しかし、そういった老農的改良方向と近代農学的改良方向の並存といった県勸業政策のあり方も、浅田徳則知事が新潟県知事として転任する明治二九年（一八九六）二月前後頃から、後者の方向を軸に据えた政策（県立農事試験場と農会を軸にした農事指導体制）へと大きく転換することになる。『信濃毎日新聞』⁵⁶は次の

第1表 長野県における近代農学側の動き

年 月 日	場 所	記 事	典 拠 資 料
明治26年12月7日	更級、上伊那両郡	農事試験場技手農学士原田清太郎、両郡巡回、講話。(原田・清水同伴)	殖産4、5、6
同 27年10月4日	下伊那郡	西ヶ原農事試験場長澤野技師、飯田町勸業会で講話(四六日)、遠里農法批判。	同右11、12、13
同 27年11月16日	西筑摩郡	同郡第四回勸業会で、農商務省技師松永伍作氏蚕業についての講話、一〇日。	同右12
同 28年3月	西筑摩郡	同郡読書村他二村で、農商務省技手兼農事試験場技手船津伝次平講話、遠里批判。	同右23、24、25、26、27
同 28年3月	西筑摩郡	船津講話中、稲作の話のところで、勸農社員井出辰次郎に实地に付き習えと言及。	同右27
同 28年3月26日	南佐久郡	帝国農家一致結合南佐久集談会に農商務省技師補石山勝太郎、同技手船津伝治平招聘。	信毎、殖産34、35
同 28年4月	上伊那郡	簡易農学校を設立、校長として堀尾農学士。	信毎
同 28年6月	小県郡	同郡蚕業学校講師に農学士三宅艦吉聘用(前福岡県勸業試験場技師)。	同右
同 28年8月13日	長野県飯田町	飯田の農談会を同町学校内に開会、上伊那実業学校教授農学士寺尾氏出演。	同右

同	28年8月14日	同右	同右	同右
同	28年11月	北安曇郡大町	農商務技手・農学士本多岩次郎蚕業上の講話、三日間。 同郡第五回勸業会で、農事試験場技師農学士原田清太郎が講話、〓五日。	殖産25
同	28年12月1日	西筑摩郡	農事試験場技手・農学士矢崎亥八が郡内五ヶ所にて農事談話会、一二日より一週間。	同右25、34
同	29年1月13日	上高井郡	同郡農事試験所長に茨城師範学校教諭農学士阿部氏を聘用予定。	信毎
同	29年2月	下伊那郡		同右
同	29年9月15日	長野県	農会準則制定（長野県令第四〇号）。	殖産34
同	30年2月25日	上高井郡、県北各郡	農事試験場技師・農学士森要太郎、二六日〓三月一日上高井、一二日以降県北各郡巡回講話。	同右39
同	30年3月2日	西筑摩郡	西ヶ原蚕業講習所技手石渡招聘、講話。二週間の予定。	同右39、40
同	30年4月	下伊那郡	西ヶ原蚕業試験場長練木技師、同研究員本多・松永のうち一人、郡内巡回講話予定。	同右39
同	30年5月	長野県	県立農事試験場長聘用予定。	信毎
同	30年5月28日	長野県	県立農事試験場長佐久間氏、試験場候補地たる上水内郡大豆島三輪を視察。	信毎

同 30年6月4日	長野県	農事試験場規則が制定される。	信 毎
同 30年6月5日	長野県	県下町村農会現数（268町村中152町村、57%）。	殖産 42
同 30年6月	上水内郡	農事試験場を上水内郡芹田村字中御所に決定。	信 毎

（注）殖産は『信濃殖産協会雑誌』、数字はその号数である。信毎は『信濃毎日新聞』をさす。
 ように伝える。

○知事更迭と県立農事試験場 浅田前知事が計画に係れる県立農事試験場は、不日勸業諮問会の協議にかけんとする間際に知事の交代ありたるに付、其成行如何あらんかと心配するものもある由なるが、側に聞く処に拠れば、之も引継事務中の一に在るは勿論、前知事は本県農事改良事業の由来を詳記し、之が設立の必要に迫られ居る理由を附して、新任高崎知事に引継ぐ筈なりと云ひ、又退いて県下農事の実況を観察すれば、米麦作改良法を郡の事業と為せるもの十四郡に達し、殊に下伊那の如きは已に農事試験場を設立せる□□、此他の郡も追々に農事試験場を設立するに至るべく、中央農事試験場と郡立農事試験場との中間に立て気脈を通じ、之が効用の完きを計る上より見るも、県立農事試験場は必要なるに付（中央農事試験場の試験に係るものは、各地方試験場の材料として与ふる目的に属するもの多く、直に之を各地方に実行すること能はざるもの少なしとせず故に、中央試験場にて試験せるものを県立試験場にて再び試験し、風土上の関係をも研究して後之を実行すべきに付、県立試験場の郡立試験場若しくは農民との中間に立つは、改良方法の順序上よりも必要なりと）、新任知事に於ても多分其方針を変ずることなく進むならんと云ふ、又之が経費は細密の調査に依るに、金三千円あれば足る可く、創立費を併せても五千円なれば充分なりと云へり

この状況は、じわじわと勸農社実業教師の諸活動への県勸業界からの注文として現れだすのである。『信濃毎日新聞』⁸²は社説として次のようにいう。

米麦の改良作に付て

江南の橘之を江北に移せば枳と為るもの、風土氣候の異なるもの有れば也。

老農林遠里翁の改良法、農理に合ひ実地に適す、故に福岡を初め同地方に於ては、噴々改良増収の効能を称せらる。然れども、之を我信濃に試むるに付ては、須らく氣候の寒暄、土壤の肥瘠等を対査し、適応の斟酌を加へずんば、万一にも失敗無きを期し得ざる可し。

該改良法を用ひて以来既に三年。好果を収めたる所も有れば、失敗したる土地も無きに非ず。而して其最も思ふ存分なる増収を得たる分は、経験の結果、該改良作の精神を採り、県下の実地に適する様に斟酌折衷したる改良作に在りとは、某改良率先家の談なるが、如何にも左も有るべきこと、思ふ。

故に吾人は、各郡の農事改良教師諸君に向ひ、徒に師の法を死守して杓子定規に陥ること無く、各地方実際の氣候風土に應じて、該法を加減折衷し、以て林翁の精神を全ふせんことを望み、(傍線は筆者による、以下同じ) 作主自身も亦此考を持ちて熱心事に当り、改良増収の凱歌を揚ぐるに至らんことを勧告す。

おそらくこの社説の前提となつてゐる事実として、遠里改良法による県下での少なからざる「失敗」があるであらう。遠里の農法を、派遣先でその「風土」を斟酌せず、「杓子定規」に試作する教師たちへの警告であることは否めないが、遠里改良法への全面的な否定には至っていない。むしろ各地での風土を斟酌し、その適応を加減し、在来的な技術との折衷を追求することこそ「林翁の精神」を全うすることであると述べる。当然といえば当然であるが、

この主張は、県下において自前の改良教師養成の主張へとつながっていく。同じく『信濃毎日新聞』⁸⁸はその社説で次のように述べている。

農事改良教師を養成す可し

今や各郡農事改良計画の実施せらるゝに付、何れも其教師を福岡なる勸農社より聘することとなるが、斯くては費用も多きを要するのみならず、福岡と本県とは氣候風土の差有り、該県にて習得したるもの、直に本県に応用し難きもの有るを以て、既往は抛ろ無とするも、爾後は本県に於て右改良教師を養成し、各地の需用に應ずること、為さんことを望む。

(中略) 本県人を用ゐて農事改良教師を仕立つことは今日の急務なれば、吾人は今後続々養成して彼の蚕業習得生が、各其地方に在りて蚕種の検査を初め、当業の改良進歩に益を与えつゝ、有るが如くならしめんことを望む。

而して養成の方法に付ては、県立農事試験場を設けるが如き最も可なり。貸費生を募り、中央農事試験場に派遣するも可なり。或は上伊那の簡易農学校若くは下伊那の農事試験場に多くの補助費を与へ、一層規模を完全ならしめ、其卒業生を教師に任用するが如きも一策ならん。

要するに、養成方法は適宜の策を択むこととし、兎に角農事の改良を盛にするに付ては、其原動器たるべき教師を造成すること必要にして、爾も事は焦眉の急を要するを以て、速に此計画書を見んことを望む。

農事改良教師を外部から招聘する場合、多額の費用がかかること、さらに彼らの伝習する技術内容が「氣候風土」の異なる地方で習得したものであり、直ちに長野県下で適応しがたいことから、「本県人」教師の養成が必要であると説くのである。その方法として、県立農事試験場を設置し、「貸費生」を募集し、彼らを中央の農事試験場に派遣

し技術習得させること、あるいは上伊那、下伊那郡に設立された簡易農学校や農事試験場へ補助金を与え、教師養成機関として整備し、この卒業生を県下農事改良教師として任用することをあげている。ここでも見られるように、県立の農事試験場の設立が、今後の県勸業政策の一つの柱として熱望されていることがわかるし、実際その方向へと大きくシフトしていくのである。

その転換を象徴するように、清水三男熊県属（県勸業当局による遠里稲作改良法の導入・普及の窓口であり、推進者でもあった）の次の発言は、勸農社実業教師への厳しい注文を含んだものであった。明治三〇年（一八九七）二月二日より開催された「農事教師打合会」における清水の発言を、『信濃毎日新聞』⁵⁹は次のように伝えている。

○農事教師打合会 予期せし如く県下各郡の農事教師は、去二十一日より上田町字海野町菱屋に於て打合会を開きたり、会する者十二名、当日は来着の遅延せしもの多きにより議事に至らず、翌二十二日開会、清水県属臨席して来年度より農事試験場設置することとなる時は、諸君の農事上に於ける所論と試験場にて言ふ所とは或は一致しがたきこと往々あるべくして、若し衝突するが如きあらんか、農事に及ぼす弊害之に過るなし、故に互いに誘導啓発相補翼して、斯業に勉められんことを請ふと陳べ、昨、今両日は会員互ひに昨年中実験したる農作上の疑問を考究する筈なりしと云ふ

清水県属に関して、長野県下に遠里稲作改良法を導入するに当って非常に重要な役割を果たしたことを拙著で逐一述べているが、この協議会での彼の議論は、県勸業政策の転換のなかで勸農社実業教師たちの琴線に触れることになったことは、想像に難くない。それまでの絶大な支持者として影となり日向となつて実業教師たちの活動を見ていた人物が、近代農学と「互いに誘導啓発補翼」することを要求したのである。

翌年、三月一五日から一七日にかけて開催された協議会は、その方向性を決定付けるように、上水内郡芹田村に設置された県立農事試験場において会頭を佐久間場長として開催された。『信濃毎日新聞』⁽⁶⁾は次のように伝える。

○県下農事教手の協議会に就て　県立農事試験場内に県下各郡の農事改良教手招集して協議会を開きたるは、実に今回を以て嚆矢とす、遠き南信地方より数日を費して態々来会するは随分苦勞なりと雖も、之がために各自の益する所は決して尠々と為さざるべし、回顧すれば本県下に普通農事の改良を企てたるは浅田知事の時代にして、当時先づ県に農事改良教手を置きて試作に着手し、模範を示して以て各郡を奨励し、爾後各郡とも漸次に改良教手を雇入れ、郡の事業として普通農事の改良を行ふに至りたるに付、県の教師を廃して県立農事試験場を設置せるものにして、県立農事試験場と各郡改良教手と各試作人との間は、常に氣脈を通ぜざるべからず、此三者能く氣脈を通じて相研究し、相琢磨し、疑義あれば則ち質し、利益あれば則ち教え、恰も一団体の如くなして、而して後始めて県下普通農事の改良を期し得べきなり、故に少なくとも県下各郡の教手は年二回位は来集して協議会を開くの必要あり、聞くが如き大抵の郡にては、此協議会に出席の費用を置かざる由なるが（従来は此会の催しなかりしに付、之が費用の無きは恆むにたらざるも）、一回一人分十円前後にて足るべければ、各郡とも今後は此費用を支出し、各教手をして十分に協議する所あらしめたきものなり

浅田徳則知事の時代に普通農事（主に稲作）の改良のため、はじめて農事改良教師を招聘し、試験田を設置し、試作指導し、その後各郡でも教師を招聘し、郡レベルでのきめの細かい改良法の導入普及が試みられてきた。県直雇いの教師を廃止し、それまでの役割を県立農事試験場が代替し、各郡下での教師たちは、試作人とともに三者が氣脈を通じて一丸となつて普通農事の改良に当るべきだとしたのである。すなわち、県雇い教師―郡雇い教師―試作人とい

う指導体制から、県立農事試験場―郡雇い教師―試作人といった指導体制への転換なのである。そして、遠里改良法のコアの一つともいえるべき「寒水浸し法」の留保（実質的な放棄）、塩水選の公認としてこの場で議論が交わされたように、この協議会は、文字通り、県勧業政策の公認の技術体系として遠里改良法の放棄を宣言したのである。

「長野県の勧業政策が全体として老農型の農事指導体制から農事試験場型のそれへと大きくシフトしていくなかで、彼らが農事試験場を頂点として、村―郡―県各レベルで創設された系統農会を通した農事指導体制のなかに実質的に同化吸収されていったことを意味した。このことは、さらに、彼らが一つの体系だった遠里改良法の普及者としてその役割を終えたことも意味した。しかし、その一方で、熟練した福岡の農業者として自らの手腕を発揮して、新たな農業指導者に衣替えすることでもあったのである」⁶⁵。勧農社実業教師たちはこの事態のもと、それぞれの思いを抱きながら、それぞれの道を歩んでいく。真鍋猪之吉もその一人であった。

第三章 園芸家真鍋猪之吉

「はじめに」でも引用したように、真鍋猪之吉は「信州リンゴの開発者」として長野県では認知されている。しかし、林遠里の薫陶を受けて、勧農社実業教師として二〇歳代前半の若さで長野県に派遣された彼は、第一章で見たように、当初は遠里稲作改良法の伝習者として県下普通農事の改良に奮闘したのである。

前述したような県勧業政策の転換のなかで、県下派遣実業教師たちは、福岡県に帰った教師もいれば、他県の農事試験場の技手として赴任したのもおり、また、新たな県勧業行政の傘下に入り、引き続き普通農事改良のために巡回教師として県下各郡に残った教師たちも少なからずいたのである。明治三二年（一八九九）の『信濃毎日新聞』⁶⁶が伝える「本県辞令」には、各郡巡回教師に任用するとして、森下岩吉（南佐久郡）、小嶋常次郎（諏訪郡）、井出辰次郎

(西筑摩郡)、真鍋猪之吉(北安曇郡)、高田久次(北安曇郡)、原田勝三郎(更級郡)、大神長次郎(更級郡)、蓑田友吉(上高井郡)、品川保右衛門(上水内郡)、坂本麻太郎(上水内郡)、筒井平七(下水内郡)の勸農社実業教師が書き上げられている。そのうち品川は拙著でも触れたように、大正期まで教師として二十七年間も任用されていた。

そのなかにあつて、真鍋猪之吉は北安曇郡巡回教師を辞したあとは、明治三十三年(一九〇〇)に下水内郡へ転任し、さらにそののち下伊那・上水内両郡へ転任し、明治四十二年(一九〇九)七月に巡回教師としての職を辞したとされている。⁽⁶⁸⁾その理由は知り得ないが、その辞職と同時に、彼は、当時の上水内郡長紀浦次郎、模範村長西筑摩郡山口村宮下虎三らと協力して、長野市上松に和合果樹園を創設し、リング栽培とその改良に邁進することになる。⁽⁶⁹⁾長野県におけるリング栽培の沿革について、『長野県の園芸』⁽⁷⁰⁾では次のように記されている。

本県にありては、明治十二年頃勸業試作場ありて、盛んに各種作物を試作せしことあり。当時本勸業課より特志家に限り二、三本宛交附されたるものなり。之れ即ち苹果栽培の起原なりとす。勿論品質の優劣、結実の良否等更に知る由もなく、唯苹果に過ず。以来遅々として不振なりしも、明治三十年頃より多少栽培を試みるに至り、其の結果、倭錦は樹勢強健にして結実又良好なれば、相当有利なるを認め、明治四十年前後急激に増加せしなり。右の如き状態なれば、倭錦を栽培するもの最も多く、柳玉之に次ぎ、其の他の品種は極めて少数なりき。爾後大正七年に至る間、順調なる發展を辿りしも、大正七年秋より九年に至る間、経済界の一大變動に伴ひ、養蚕業頓に有利となり、將に結実樹齡に達せんとする苹樹は伐採され、桑園に転換するもの続出し、一時栽培面積減少されたり。其の後蚕業の不振に比し、苹果は好況時代の価格を維持せしが為、再苹樹を栽培し、以て今日の如く県下約五百五十町歩の栽培反別を算するに至れり。

明治一二年（一八七八）といえば、中央の勸業政策においては、いまだ西洋農業の直輸入的政策が継続しており、外来品種や外来作物の輸入・全国試験場への頒布がおこなわれていた時期である。長野県ではその一環として苹果（リンゴ）の栽培が試験的におこなわれていたのである。しかし、その後は明治三〇年頃までその普及は遅々として進まなかったが、「倭錦」種の開発、その栽培普及をきっかけとして、栽培面積は四〇年前後から急速に拡大したというのである。

この時期、真鍋は諸郡での巡回教師を辞し新たな道を模索しており、推察するに、県下でのリンゴ栽培の可能性とその試作に目を向け情熱を傾けたのではないであろうか。

前述の『長野県の園芸』¹⁾には、「苹果収支調査」として「長野県上松和合果樹園（園主真鍋猪之吉氏）」についての内容が最初に掲載されている。同果樹園の概略として「善光寺より北東二十丁、長野市上松区和合に在り、傾斜地栽培にして、面積約十町歩ありて、本県第一の大果樹園たり、栽培品種、紅玉・倭錦・国光・祝を主とす、土壤礫壤土なり」と記述しており、昭和二、三年頃の同果樹園が一〇町歩の面積であり、長野県下第一の規模を誇るとしている。収支としては、反当り支出一一八円二五銭（肥料代：二五円二〇銭、施肥人夫男三人：三円六〇銭、剪定男二人：二円四〇銭、摘果男三人：三円六〇銭、小袋掛男二人女二人：六円三〇銭、大袋掛實：五円九五銭、大袋代：三円八三銭、小袋代：二円四三銭、中耕及除草男二人女二人：四円、薬剤費：一八円五〇銭、薬剤散布人夫男三人：四円六〇銭、袋取り男一人女一人：一円八〇銭、収穫及運搬男二人二分：二円六四銭、選果及県外出荷荷造運搬人夫男一〇人五分：一二円六〇銭、落葉片付女一人：八〇銭、農具損料：三円、雑費：四円、公課諸掛：一三円）、収入二七三円五〇銭（果実一等品：二二円、同二等品：四八円、同三等品：四円五〇銭）、差引き一五五円二五銭の「益」としている。また「備考」として「本園は大面積に不拘、堆肥を多量に施用する様努めつゝあり」と記している。

明治四十年代初頭にリンゴ栽培に着手し、二〇年足らずの間に「本県第一の大果樹園」とまで評される成功をおさ

めるにいたったのである。

彼のリング栽培にかけたこれほどの情熱はどこから湧き出てきたのであろうか。二十歳代前半に勸農社実業教師として長野県に派遣され、遠里農法の普及に尽力した彼は、県勸業政策の転換のなかでも県下各郡の巡回教師として一〇年あまりの間活動をした。その過程でおそらく県下におけるリング栽培の技術的未熟さを見て取り、実業教師としての「魂」を揺さぶられるものを感じ、その改良と栽培普及に邁進したのではなからうか。

第四章 恩師 林遠里先生

真鍋猪之吉の父茂三郎は、天保一〇年（一八三九）一〇月に筑前国那珂郡市ノ瀬村（現福岡県那珂川町南畑字市ノ瀬）で父与吉の四男として生まれた。万延元年（一八六〇）に同村の堀江藤作の長女イソを娶り、明治三年（一八七〇）一二月に分家をする。それから一年ほどした明治四年（一八七一）一二月に、長男伊之吉（猪之吉）をもうけることになる。⁽⁷²⁾

市ノ瀬村は福岡市を流れる那珂川の上流に位置し、「地形嶮岨、前後二山アリテ、運送ノ便下⁽⁷³⁾」と評されるように、狭隘な谷間に広がる村である。明治一〇年（一八七七）前後には、戸数八一戸、人口三九三人の小村で、農を主要な生業とし、田一九町八反余り、畑一町余り、それに対して山林は八二七町五反余りであった。牛四〇頭、馬二一頭を飼育し、物産として米三九〇石、麦六五石、大豆五斗、小豆八斗、粟三石、蕎麦三斗、里芋二千斤、蜜柑五千、柿三万、栗一五石、椎三斗、茶四百斤、山芋五百斤、その他輸出品産として、山葵、筍、蕨、楊梅、木楮、蜂蜜、榎実、菜種、材木、薪、竹、桤炭などがあつた。⁽⁷⁴⁾

こういう村で生まれた猪之吉は農の経験を蓄積していくが、明治三三年（一八九〇）五月には、筑紫郡安德村から



写真3 現在の市ノ瀬の景観

妻ユタカ（明治六年八月生まれ）を娶ることになる。満一九歳の猪之吉と満一六歳のユタカとの新婚生活が市ノ瀬で始まった。しかし、それも束の間、四年後の明治二十七年（一八九四）年八月には、勸農社実業教師として猪之吉は長野県北安曇郡に旅立つのである。猪之吉が勸農社にいつの時期に入社し、遠里からの薫陶をどのように受けたかを知る術はないが、「勸農社社員名簿」には、入社年月日未詳のままその名前が記載されている。

猪之吉は父茂三郎が明治四三年（一九一〇）十一月に隠居すると、その家督を相続し真鍋家の戸主となるが、この時期、彼は長野県で生活をしている。また、大正六年（一九一七）一月の父の死後、彼の母イソを長野県に呼び寄せたのであろう、イソは大正一四年（一九二五）七月に長野市大字上松で息を引き取っている。猪之吉は昭和七年（一九三二）一〇月に同じく上松で人生を全うして

いるが、彼は生前一貫して本籍を福岡県筑紫郡南畑村大字市ノ瀬に置いたままであった。そのことからわかるように、福岡県市ノ瀬出身の農民であるということが、長野県での彼の活動と生活を支えた一つとなったのである。

また、勸農社から派遣された実業教師としての彼は、終生その創設者であった林遠里を尊敬しつづけた。この点に關して、現在も真鍋家に所蔵されている遠里の「肖像画」についてふれておきたい。

この「肖像画」は、前出『福岡県史』の口絵の最初に掲載した遠里の写真を模写したものであった。その裏書には、次のように記されていた。

恩師 林遠里先生之肖像 大正十五年一月 真鍋猪之吉識



写真4 林遠里肖像画

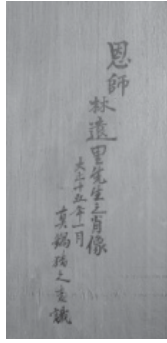


写真5 同裏面

「肖像画」が誰の筆によるものかは定かではない。また、猪之吉が遠里の「肖像画」をなぜ手にしたのか、これも定かではない。しかし、大正十五年（一九二六）一月に猪之吉はその「肖像画」を手にし、その裏書に、「恩師 林遠里先生」と書きとどめた彼のその思いはいかなるものであったのか。

彼が若くして遠里の薫陶を受け、勸農社実業教師として長野県に派遣され、勸農社衰退のあとも長野県に残り、長野県農業の改良に尽力し、「長野リングの開発者」とまで評されるにいたった人生を顧みたとき、農事改良者として勸農社「後」の彼を支えたものは、自ら生を享け、農事体験を積んできた「ふるさと」＝「市ノ瀬」であり、他方、彼を勸農社実業教師として長野県に派遣した「恩師林遠里先生」であつたのである。

おわりに

明治二〇年代後半に入ると、全国的には政府勸農政策の再転換（老農依存型から近代農学者を主軸とした試験場依存型、さらに系統農会の開設とそれを軸とした指導体制への再転換）のなかで、「老農時代」に旺盛な活動を繰り広げた勸農社をはじめとする老農たちへの行政的な支持基盤は揺らぎ、彼らの活動の受け皿は狭まる一途であつた。その結果、全国的規模で老農（実業教師）たちを聘用しようとする機運は弱まり、農事改良での彼らの登壇場面は狭まり、彼らは脇役としての悲哀を甘受することになるのである。

明治二四、五年（一八九一、二）に拡張された勸農社は、その事業収入の多くを、全国各地に派遣していた実業教師たちから上納される「維持金」に負っていたことから、その聘用の減少は事業収入の減少に直接結びつき、さらに、明治二七年（一八九四）頃に、勸農社拡張の目玉であった第二、第三農場を閉鎖し、それによる「作徳米」収入も見込めなくなったことから、経営的行き詰まりを顕在化させることになるのである。ただし、長野県のような勸農社実業教師聘用の後発県においては、ある程度の派遣教師数は維持していたが、本稿第二章でみてきたように、県勸業政策の転換のなかで、早晚同じ方向をたどることになった。

明治三〇年（一八七九）前後になると、勸農社は結果として膨大な借金を抱えることとなり、山部信をはじめとする勸農社の幹部は、その処理のために全国を奔走することになる。この状況のなか、長野県では『信濃毎日新聞』に次のような記事が掲載された。⁷⁷

○勸農社義捐金の勧誘　鳥居北佐久郡長には福岡県勸農社林遠里翁の為に、左の書面を町村長へ発したる由
拜啓、福岡県林遠里翁は夙に身を米作の改良に委ね、去十七年以来独力を以て勸農社を創設し、其社員を各地方に派出して、積年辛苦發明せし作法を伝へ其功労少なからず、既に本県の如き其指導を受け余沢を蒙り、着々米作改良の積を見るに至りしは、翁に對し感謝する所に有之、然るに、翁は其家産を挙げて該社の事業に充て、且常に各地方の為に奔走し、一家の経営を念とせざりし為め、負債を生じ目下三千七百円に上り、頗る困難に陥り居候趣、尤も翁は是等の事を意とせず、仮令倒産するも国家の爲なれば、敢て辞せざる所なりとて、益銳意各地方の爲めに奔走尽力しつゝ、ありといふ、社員等之を座視するに忍びず、生徒高橋□事上京の際、同社理事山部信より之か救済の方法に付申出の次第も有之趣、且京都、福岡、宮城、山口、香川、静岡等各県知事に於ても義捐金募集の協議も有之候に付ては、本県に於ても凡そ百円を目的とし金円を拠出し、該社の困難救済の資に供し度旨にて高崎知事よ

り被申越候間、本郡の如きも同社より二名の教師を雇入候次第に有之旁、其抛集の方法等は適宜御考案の上、御部内有志者等に謀り、可成相綴り候様御尽力相成候はゞ、本懷の至に御座候、拝具

本記事によると、この時点で勸農社は四千円足らずの負債を抱えているにも関わらず、遠里は「国家の為なれば」倒産も辞さないという気概で、ますます「各地方の為に奔走尽力」している。その気概に答えるべく、勸農社の活動を支えていた各府県知事による義捐金募集の動きがあり、長野県でも一〇〇円を目途に義捐金を募集したいという高崎知事の申し越しに対し、北佐久郡長から郡下各町村長に義捐金の募集を依頼している、というのである。

一読すると、勸農社長林遠里の経営力の無さと読めなくもないが、全国的な勸農政策転換の大きな流れのなかで、頑なにその改良法の優越性を確信し、国家のために奔走尽力する「老農」の姿を彷彿とさせるのである。

彼の壮大な「こころざし」（遠里稲作改良法の普及による「国富」の増進）は、直接的には達成されることなく、明治三十九年（一九〇六）に遠里自身の死をむかえることで頓挫してしまう。「老農時代」の終焉を象徴するように。

勸農社「後」の実業教師たちのたどった道はそれぞれであった。本稿でみたように、派遣先に定住し、その地の農事改良のために貢献した真鍋猪之吉のような来し方も、その一つであろう。彼は「長野県リングの開発者」と評されるまでの貢献をしたわけであるが、その「魂」を支えたものは、若くして農事体験を蓄積した地である「ふるさと」＝福岡県市ノ瀬であり、終生尊敬しつづけた勸農社の創設者＝「恩師林遠里先生」であった。

(1) 郷土出版社 一九八九年七月。

(2) 『老農時代』の技術と思想（ミネルヴァ書房 一九九七年）。

(3) 福岡県 一九九二年。

- (4) 長野県における林遠里稲作改良法の導入に関しては、拙書第七章「明治二〇年代長野県における林遠里稲作改良法の導入」参照。
- (5) 明治二十七年二月『信濃殖産協会雑誌』第三号所収記事「北安曇郡に於ける米作改良の準備」より引用。
- (6) 同前記事参照。
- (7) 第一〇号 明治二十七年九月。
- (8) 第一九号 明治二十八年六月。
- (9) 真鍋は、明治二十七年（一八九四）八月一日に着任後、二ヶ月ほどして開催された北安曇郡常盤村での農談会で演説をおこなっている。その様子を『信濃毎日新聞』（明治二十七年九月二十九日付記事）は、次のように伝えている。
 ○北安曇郡常盤村農談会 同会は一昨廿四年四月創立以来漸次盛会に赴むき、目下会員は百五十余名もありて、毎年四月開会すべき筈なれども、本年は村長役場吏員等の選挙等にて延引し、去る廿五日午後三時より同村役場内に開会せり、郡役所よりは先頃本郡米作改良教師として雇聘せる福岡県勸農社員真鍋猪之吉氏出張し、出席の会員は三十三名にして、先づ役員の選挙を行ひたるに、会長に清水平右衛門氏、副会長に清水式次氏当選せり、次に真鍋氏の稲作改良に関する熱心なる演説、次に清水会長は村内に試作場設置を必用とするの意見を述べたるに、西山区青年会に於て該試験田設置致したしと申出たり、又村内の小学校へも附属として設置致したしとの説出で、何も大多数にて一決し、其費用の幾部分は近々村会を開いて補助することを議する由、其他種々海産肥料の結果、及害虫駆除等稲作に関する談話ありて、午後七時頃散会せり
- (10) 国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」よりダウンロードした。本資料検索に当たっては神戸大学大学院成田雅史氏の助言を得た。
- (11) 『明治廿七年 北安曇郡第壹回勸業会日誌 附種苗交換会記事』（明治二八年四月 長野県北安曇郡役所）七頁より引用。以下では『日誌』と略す。
- (12) 『日誌』七～八頁より引用。
- (13) 遠里もこの選種法では、「稲ノ生長シタルトキ、田圃ニ就テ視察スベシ」（『米作改良講話筆記』明治二十七年一月 和歌山県内務部より引用。同「筆記」は『福岡県史』近代史料編「林遠里・勸農社」に収録されている）と述べ、「肉眼選」を推奨している。
- (14) 『日誌』八～九頁より引用。

- (15) 『日誌』 九頁より引用。
- (16) 遠里改良法中最善の方法として奨励される畑苗代に播種する冬蒔き法をさす。詳細は「苗代法」のところで考察する。
- (17) 『日誌』 九頁より引用。
- (18) 同前書、一九頁より引用。
- (19) 同前書、一三頁より引用。
- (20) 同前書、一四頁より引用。
- (21) 同前書、同前頁より引用。
- (22) 拙書序章「『稲作論争』の問いかけのもの―天性に従うか、天性を率いるか―」参照。
- (23) 『日誌』 一五頁より引用。
- (24) 遠里は当初からこの論理を取っていたわけではなく、『稲作之伝書』においては「稲水草論」を採っており、その後「稲好水論」へと変化する。その変化については、拙著第二章第九節「遠里農法の完成」参照。
- (25) 『日誌』 一五頁より引用。
- (26) 同前書、同前頁より引用。
- (27) 同前書、二〇頁参照。
- (28) 同前書、二三頁より引用。
- (29) 同前書、二四頁より引用。
- (30) 同前書、四七頁より引用。
- (31) 同前書、四九頁より引用。
- (32) 同前書、二六頁より引用。
- (33) 同前書、三三頁より引用。

- (34) 同前書、三三頁より引用。
- (35) 同前書、三九頁より引用。
- (36) 同前書、四一頁より引用。
- (37) 同前書、同前頁より引用。
- (38) 同前書、同前頁より引用。
- (39) 同前書、同前頁より引用。
- (40) 同前書、同前頁より引用。
- (41) 同前書、同前頁より引用。
- (42) 同前書、四二頁より引用。
- (43) 同前書、五四頁より引用。
- (44) 同前書、五一、五三、五五頁より引用。
- (45) 同前書、五三頁より引用。
- (46) 同前書、五五頁より引用。
- (47) 「苞虫」の生態および駆除法については、『明治農書全集』第二二卷「病虫害・雑草・農薬」(農山漁村文化協会 昭和五九年)に収録された諸文献および小西正泰氏による「解題」を参照されたい。
- (48) 『日誌』五八、五九頁参照。
- (49) 同前書、六一頁より引用。
- (50) 同前書、六二頁より引用。
- (51) 『福岡県史』近代史料編「林遠里・勧農社」(平成四年三月 福岡県)所収。
- (52) 同前書、所収。

- (53) 同前書、所収。
- (54) 同前書、所収。
- (55) 国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」よりダウンロードした『明治三十年 北安曇郡第一回農会日誌』を参照。
- (56) 明治二十九年二月二日付記事より引用。
- (57) 明治二十九年二月九日付記事より引用。
- (58) 明治二十九年三月四日付記事より引用。
- (59) 明治三〇年二月二四日付記事より引用。
- (60) 拙著第七章「明治二〇年代長野県における林遠里稲作改良法の導入」参照。
- (61) 明治三十一年三月二〇日付記事より引用。
- (62) 『信濃毎日新聞』明治三二年三月一九日付記事「〇県下農事改良教手の協議会」参照、拙著二五九～二六一頁参照。
- (63) 拙著二六〇頁より引用。
- (64) 北佐久郡での米作改良教師制度の廃止に伴い、同郡に派遣されていた神代米吉は、明治三十一年（一八九八）三月限りで解雇され帰国している。ちなみに、同じく同郡に派遣されていた榊兵三はその廃止とともに郡農会雇となる（『信濃毎日新聞』明治三二年三月二七日付記事による）。
- (65) 小県郡に明治二十九年（一八九六）四月に派遣された古川列一は、郡農会設立の中心人物として働き、同郡農会の副会長まで務めたのち、明治三一年（一八九八）年四月一八日に新潟県農事試験場技手として同県に赴任している（『信濃毎日新聞』明治三一年四月二〇日付記事による）。ちなみに、古川は小県郡での活動の折、助教師として任用されていた松山原造に牛馬耕を伝習し、のちの松山塾開発のきっかけを与えたことはつとに知られている。松山塾開発については、岡部桂史「創業期の松山塾製作所の経営発展と地方企業家・松山原造」（『経営史学』第三九巻第3号所収）参照。
- (66) 明治三二年一月一二日付記事参照。
- (67) 拙著二三九頁参照。

(68) 「はじめに」で引用した「頌徳碑」の碑文による。

(69) 同前書。

(70) 日本園芸会長野県支会 昭和四年。四六頁より引用。

(71) 同前書、五七頁く五九頁参照。

(72) 猪之吉の孫真鍋慶子氏作成の系図および聞き取りによる。

(73) 『福岡県史』近代史料編「福岡県地理全誌（五）」（福岡県 平成五年）三六六頁より引用。

(74) 同前書、参照。

(75) 前掲『福岡県史』近代史料編「林遠里・勸農社」所収。

(76) 拡張後の勸農社の収支構成を示す「予算書」に関しては、拙書第二章「林遠里と勸農社」第一〇節「勸農社の拡張」参照。

(77) 明治二九年七月一日付記事より引用。

なお本稿調査・執筆にあたっては、平成十六年度私立大学等経常経費補助金特別補助高度化推進特別経費大学院重点特別経費（研究科分）の助成を受けた。

Abstract

Takashi NISHIMURA, *The Activity of Inokichi Manabe, an Agriculture Teacher at Kannousha in Nagano Prefecture*

Inokichi Manabe, who was sent to Kita-azumigun in Nagano Prefecture in 1894 as a teacher at Kannousha (an agriculture reform insititute), worked hard at first under Enri Hayashi for the spread of instruction in improving the rice farming. But, around 1900 Kannousha waned and the agriculture reform project by the prefecture was changed. So Manabe wrestled with developing the apple crop in Nagano and worked hard to grow it into one of the leading apple producing centers in Japan. It was Manabe's respect for and deep attachment to Enri Hayashi who sent him to Nagano and brought him up there that made it possible for him to continue his activity, in addition to his pride as an agriculture reformer and his experience in Fukuoka Prefecture, his hometown. In the latter half of the Meiji Period, the leadership of the agriculture reform was converted to the nation and the Government, and the agriculture reformers who had been actively engaged in this field outside the Government influence began to walk away from the agriculture reform movement, but there were some who remained very enthusiastic about the movement. Inokichi Manabe I take up in this paper was one of them.